

電氣鳩

海野十三

青空文庫

あやしい鳩はと

高こういち一とミドリミドリのきょうだいは、伝書鳩でんしやうをかっていました。

もともとこれは、お父さまがかっていらつしやる鳩なのですが、お父さまがある大切なご用で、とおいところへお出かけになってからは、二人のきょうだいが世話をしているのです。

鳩はみんなで十羽じゆいました。半分は金あみをはり、半分は板をうちつけて作つてある鳩き舎しやのなかに、かつてあるのです。鳩舎は、お家のうらの丘のうえにおいてありました。鳩は、とてもよくきょうだいになつていました。

そのなごやかな鳩のむれが、どうしたことか、ちかごろなんとなくおちつかないようすです。きょうだいが気をつけていますと、たしかにへんです。ふだんならば、鳩たちは一日中鳩舎のまわりに、なかよく、くうくうとないていますが、それがときどき、にわかにかに羽ばたきもあらあらしく、いつせいに空にまいあがってさわぎます。はては、お家の

屋根につばさをおさめて、おちつかないようすで、あっちへいつたりこつちへきたり、きよろきよろと、下をうかがっているのです。鳩たちはどうしておちつかなくなったのでしょうか。

その日もゆうがたのことでしたが、鳩たちは空にいりみだれて大きわぎをはじめました。高一とミドリは、いそいで鳩舎にかけつけました。すると、鳩舎の上には一羽の鳩がのこっていました。

「オヤ、へんな鳩がいるぞ」

「うちの鳩じゃないわ。どこのでしょう」

それは、みなれない鳩でした。

ふつうの伝書鳩なら、ぜんしんは石板色で、首のところに金みどりのぶちがあるのですが、いま鳩舎の上のこっている鳩は、からだの色が、紺こんじょう青で、そしてつばさのさきには、ふとい金のすじが二本とおっていて、よくみればみるほど、かわった鳩でした。その上その鳩は、まるでつくりものあしでもつけているように、みように両足をひきずつて歩くくせがありました。

「もっとよく見てやろう」

と、高一は鳩舎の方にちかづきました。

そして青い鳩に、ぐっと手をのぼしたところ、思いがけなくもゆびさきが、電気にふれたときのようにぴりぴりとしびれました。

「あつ——」

と、高一はおどろいて手をひっこめました。そのとき鳩は羽をふるわせて、急にくるとむきをかえると、きみのわるい羽ばたきをして、さつと空にまいあがりました。が、そのとびかたのすばやいことといったら、まるで戦闘機が地上から、おおぞらへむかつて、^{ぼうあが}棒上りにのぼるのとかわりません。あまりのものすごさに、高一もミドリもあつけにとられて、あやしい鳩の行方^{ゆくえ}をみおくっていました。

ちようどそのころ、この村のうんと上空を一だいの大きな飛行機が、あとに三だいのグライダーをひいてとんでいました。それは、こんどあらたにつくられた三百人のりのすごい飛行列車です。あやしい鳩はおそれもなく、その飛行列車にずんずんちかづいてゆきました。おどろいたのは飛行列車の三人の試験操縦士です。

「おや、あの鳩は、ちつともにげないぜ」

「かわいそうに、いまにはねとばされるぞ」

そういつているうちに、あやしい鳩は弾丸のように、その翼よくにぶつかりました。

「あつ、たいへん！」

たちまち翼はそのところから、まつぶたつにわれ、飛行列車は黒いけむりをあげて、とんぼのようにもつれあいながら、地上につらくしました。五キロもさきの山の中に。しかし、このできごとが、あやしい鳩のためにおこったとは、だれも気がつきません。

電気鳩

「ねえ、兄ちゃん。どつかのお家の鳩が、うちの鳩とあそびたいって、それでおりてきたのよ、ねえ」

「うん——」

高一はなまへんじをしました。だって、つかまえようとすれば、ゆびさきがぴりぴりしびれる鳩なんてあるものでしょうか。

そのときでした。飛行列車がいくらくをはじめたのは。

でも、ずっとはなれた高い空の上のことですから、二人はあとで、村の人から話をきくまで、気がつきませんでした。

ミドリは鳩舎をあけてやりました。するとお家の屋根にとまっていた鳩は、大よろこびで鳩舎の中へかえってきました。

しかしそのとき、きょうだいは意外なことに気がついて、目をみはりました。

きょうだいのおどろいたのもむりはありません。十羽いた鳩が九羽しかいないのです。

さあ、一羽はどこへ行ってしまったのでしょうか。きょうだいは血眼で家のまわりをさがすうちに、うらの竹やぶのなかに、つめたくなっている鳩の死がいを見つけました。

「かわいそうに。お前は どうして死んだの」

「これはきつと、あの電気鳩のせいだよ」

「えっ電気鳩？　電気鳩ってなあに？」

そこで高一はミドリに、さっきの青い鳩にさわろうとすると、ゆびがぴりぴりしびれたことを話してきかせました。それで電気鳩、電気鳩と名をつけたんですが、ほんとうに電気鳩が、うちの鳩をころしたのでしょうか。まったく、きずひとつないのに鳩は死んでい

るのです。

「ようし、一つ工夫をして、あの鳩をつかまえてやろう」

そのつぎの日の夕方、高一とミドリとが見はつていると、はたして、その電気鳩が空からおりてきました。お家の九羽の鳩は大きすぎして、屋根の方ににげてしまいました。しかし鳩舎の上には、まだ一羽の鳩がじつととまっていました。

電気鳩はひらりと飛びおりて、そのじつとしていゝ鳩の方へ足をひきながらちかづきました。

すると、どうでしょう。かちつと音がして、電気鳩は高一のしかけたわなに、足をはさまれてしまいました。しかし、電気鳩はたいへんな力をだして、そのまま空へまいあがりました。足にながい赤い紙テープを目じるしにして、電気鳩をおいかけてゆきました。が、さんねんにも見うしなつてしまいました。

それにひるまず、つぎの日、高一はまたべつの工夫をして、まちかまえていました。

その夕方、やはり電気鳩は下りてきました。そして、昨日とおなじように、鳩舎の上におりて、よちよちと二、三步あるいたかとおもうと、たちまち、かちつと音がして、電気鳩は足をはさまれました。が、やつぱりにげてしまいました。そのとき鳩の足には、長い

赤い紙テープのほかに、小さなガラスびんがさかさまにつりさがっていました。びんの口からは、とてもいやなおいがしました。

電気鳩が飛びだしたと見るや、高一は愛犬マルという、よくはなのきく犬をつれて、いっしょに電気鳩のあとをおいかけました。電気鳩は昨日とおなじように村ぎかいの山の方にとんでゆきます。赤い紙テープをながくひきながら、ぐんぐんとんでいって、やがて、すがたがみえなくなりました。

でも、高一は、べつにあわてるようすもなく、しきりに、はなをならして走るマルのあとについて、どんどん山の中にわけいました。

先にたつて走っていたマルは、そのうちに人の出入りができるほどのほら穴の前までくると、ほら穴の入口の草をしきりにかいで、急にうごかなくなりました。高一は、

「うむ、このほら穴にはいったのだな」

と、ほら穴をにらんで、おもわずひとりごとをいいました。

穴のなかの人

だれもしらないことですが、飛行列車をついらくさせたのは、電気鳩のしわざでありました。高一は、そんなこととはしらず、ただ鳩舎へおりた電気鳩が、だいな伝書鳩をころしたのにちがいないとおもって、愛犬マルといっしょに、この山のおくのほら穴の前まで、電気鳩をついせきしてきたのであります。

マルは、しきりとはなをならして、ほら穴のなかをにらんでいます。

「マル、しつかりたのむよ」

高一のうまい工夫とマルのでがらとで、電気鳩は、このほら穴のなかにはいったことがわかりましたから、つぎは、なかにはいつて電気鳩をうまくつかまえることです。

高一は、穴のなかにはいつた鳩などはわけなくつかまえられるものとおもっていました。それで、いさましくも高一はマルをつれて、まつくらなほら穴のなかにずんずんはいつて行きました。用心のために、もつてきた懐中電灯がきみのわるいほら穴の中をてらして、とても力づよいのです。しかし、かんじんの電気鳩は、どこまでふかくはいつたものか、いつこう、そのすがたが見えません。

「へんだなあ。どこへかくれちまったんだろう」

高一はマルの頭をなでながら、立ちどまりました。

その時でした。マルがひくくうなりました。高一のさとい耳は、この時、たれか人の話しごえが、ほら穴のもっとおくの方から、ぼそぼそきこえてくるのをききつけました。

「おや、こんなほら穴のなかに、たれか人間がいるよ」

高一はふしぎにおもい、マルの首をおさえながら、しずかに、ほら穴のおくの方にちかづいて行きますと、とつぜん、

「さあ、どうしてもいわねえというのだな」

と、どなるこえがきこえました。

高一がおどろいておくのをのぞくと、そこには、めずらしく電灯などがとぼつていて、五、六人のあらくれ男が、まるいかたちになすわっています。そして、そのまんなかに、一人の男がしばられていました。

かわいそうなのは、そのしばられた男です。身うごきもできないばかりか、おおぜいのあらくれ男から、ひどい目にあっています。

ちようど、高一のみている方からは、そのゆわえられた男はうしろむきになっていたの

で、だれだかよくわかりませんでした。もし、高一にその男の顔が見えたなら、どんなにおどろいたことでしょう。その時、しばらくしていた男は、きつと顔をあげると、「いくらきいてもむだだ。ころされたって、いわないといったらいわないのだ」と、さげびました。

そのこえをきくと、高一は、はつとおもいました。そのこえにききおぼえがあつたのです。

「あつ、お父さまだつ」

高一のお父さまは、ご用のため、とおくへお出かけになつたはずなのに、なぜこんなほら穴のなかに、しばらくしているのでしょうか。高一もびつくりしましたがマルもおどろいてわんわんとほえました。さあたはいへんです。

「だれだつ」

あやしい男たちは、いつせいにたつて、高一のかくれていた方へむかってきました。高一是あぶなくなりました。マルは一生けんめいで、ほえています。

いまはこれまでとおもい、高一はそのすきに紙きれに、はしりがきをすると、腰にさげていた伝書鳩のあしにつけ、ぱつとはなしました。鳩は、くらやみのほら穴をぬけておも

てへとびます。だが、つづいてとび出したのは、おそろしい電気鳩！

つがいの鳩

ほら穴の中の、おそろしいかくとうをあとにして、高一の手紙をもった伝書鳩第一号は、さっとおもてへとびだしました。

くわつくわつと鉄のくちばしをならしながら、そのあとをおいかけるのは、おそろしい電気鳩です。

伝書鳩第一号も、前に電気鳩にひどい目にあっていたので、わざと森や林の中をぬけたり、きゆうに下にまいおりたりなどして、一生けんめいににげて行きました。

しかし、おそろしい電気鳩のくちばしをのがれることはできず、つばさはきずつけられ、羽根はぬけ、一方の目はつきやぶられてしまいました。それでも、伝書鳩第一号はがまんをして、とうとう自分の鳩舎にたどりつきました。

まつさきにそれを見つけたのは、るすをしていた高一の妹ミドリです。

「あらあら、鳩があんなになって……」

ミドリは、はしりよって鳩舎の上に、つばさをひろげたままたおれている第一号を、そつとおろして、胸にかかえてやりました。

そのとき上の方で、くわつくわつとあやしいこえがきこえました。

第一号はそれをきくと、くるしい中からくうくうとないて、ミドリにあぶないから用心なさいとしらせました。ミドリがすぐに家の方にかけてさなかつたら、電気鳩のために、どんなひどいけがをしたかわからないのです。

「ミドリちゃん。なにをさわいでいるの」

軍服すがたの良太^{りょうた}おじさんが顔をだしました。

血にそまつた鳩のあしから、高一のはしりがきした紙きれがはずされました。

「これはたいへんだ」

と、良太おじさんは、顔色をかえていいました。

「ミドリちゃんのお父さまが、あやしい一団につかまっているそうだ。さつそく憲兵隊へしらせなきやいかん」

憲兵軍曹である良太おじさんは、じつはミドリのお父さまが、ある大事なご用をひきうけて旅にでたのに、いつまでたつてもかえつてこないのをしんぱいして、ちようどいま、たずねてきたところなのでした。さつそく、けがをした伝書鳩第一号のもちかえった紙きれをもって、憲兵隊へとだけたのでまもなく一隊の洋服すがたの憲兵が、トラックのつてミドリの家にのりつけました。

さあ、なにごとがはじまるのでしょうか。

憲兵さんの話によると、なんでも、すごい電気鳩をつかう外国のスパイがいりこみ、なにか、しきりにわるいことをたくらんでいるとは、わかっていたが、そのスパイ団がどこにいるのかわからなくてこまっていたのです。ところがいま、高一少年のおかげで、ほら穴のひみつがしれたので、大よろこびです。

「さあ、電気鳩退治だ」

と、憲兵さんは力をこめていいました。

「電気鳩さえ退治してしまえば、スパイ団も水をはなれた魚のようによわってしまいうだらう」

ミドリは、それよりもお父さまと高一兄さんとを、早くたすけてください、とたのみま

した。

いよいよあやしいほら穴にむかうことになって、憲兵さんたちは、こまった顔をしました。そのほら穴へは、どう行けばいいのでしょうか。

そこへ、おりよく愛犬マルが、足をひきながらかえってきました。

「ああマルか……。兄ちゃんは？」

ミドリは、すぐ庭にとびだしてみましたが、高一のすがたはどこにもみえません。マルだけが、ほら穴からぬけてきたものと見えます。

マルという、いい道案内ができたので、憲兵さんたちはよろこびいさんでかけました。ところが山の中にはいった時は、日がまったくくれてしまいました。そのうえマルがどこかに行ってしまったので、憲兵さんたちは、どうしてよいかわからなくなってしまいました。

その時です。上の方でくわつくわつというなきごえがしたとおもうと、一つの光るものが、さつととんできました。おそろしい電気鳩があらわれたのです。

ぬけ穴

おそろしいスパイ団のため、山の中のほら穴に、とりこになっている高一少年とお父さまは、今どうしているのでしょうか。

ミドリのたのみをきいて、良太おじさんは一隊の洋服すがたの憲兵をひきつれ、高一の愛犬マルを道案内に、その山の中にわけいました。ところが途中でマルのすがたがみえなくなり、スパイ団のほら穴へゆく道が、わからなくてこまっっているとところへ、光まばゆい電気鳩がとんできたのです。

「ふせっ」

と、良太おじさんはさげびました。

「こんなおそろしい電気鳩を、生かしておいてはあぶない。軍曹どの、こいつを私にうたせてください」

と、一人の憲兵がピストルをだしました。

「まあ、まてっ」

と、良太おじさんは、いそいでそれをとめ、

「そんなことよりも、電氣鳩がどこへゆくか、あとをつけてゆく方が大事なんだ。さあ、その二人は、電氣鳩をすぐおいかけろ」

さすがに良太おじさんです。あわてずさわがず、二人に電氣鳩のあとをおわせました。

そのとき、べつの方角から、わんわんと犬のほえるこえがきこえてきました。マルです。マルがほえているのです。良太おじさんは、むつくりおき、

「よし、のこつた者は、自分についてこつちへこい」

スパイ団のほら穴は、いよいよ近くにあることがわかりました。

良太おじさんは、いさましくも憲兵隊のまつさきにたつて、草をわけて走ります。おりから、ちようどむこうの山から月がでました。

「こんなところにほら穴があったぞ。さあ、このなかへ突撃だつ」

というが早いのか、良太おじさんは懐中電灯を片手に、さつとほら穴へとびこみました。みんなもそれにつづきました。

すると、べつの方角から、ぼんぼんという銃声がおこりました。

「うわあつ、憲兵だつ」

と、よろめきでてくるスパイ団は、そこにも良太おじさんたちのすがたをみて、二度びつくり。

「スパイどもめ！　こうなつたら、ふくろのねずみもおなじことだ。さあ降参しないかつ」と、おどりかかる憲兵隊に、さすがのスパイたちも、あれよあれよとさわいでいるうちに、しばりあげられてしまいました。

「あ、良太おじさん——」

と、ほら穴のおくから、こえをかける者がありました。

「おお、そういうこえは……」

と、良太おじさんがかけつけてみると、それはまさしく高一でありました。かわいそうに、太いなわでぐるぐるまきにされ、牢ろうのようななかにころがされていました。

なわをとこうとすると、高一は頭をふつて、おくをむき、

「お父さまがいるはずです。はやく助けて……」

「ばんざあい」

と、大きなこえがおこりました。どうなつたかと心配していた高一少年や、高一のお父さまで、お国のためはたらいっている秋山技師の二人を助けだすことができたし、そのうえ

スパイ団のわる者も、おおぜいつかまえることができたのですから、大手がらでした。

「へんだなあ——」

良太おじさんが、首をかしげました。

「なにがへんなのですか」

「だって、電気鳩が、このほら穴にとびこむところをみたのに、いまこうしてさがしてみてもいないじゃないか」

「おかしいね。これはどうやら、ほかにぬけ道があるらしいぞ」

にげた団長

「おじさん。お父さまをくるしめていたスパイ団の団長がみえないよ」と、高一少年がさげびました。

「なに団長が……。うむ、いよいよぬけ道があることにきまつた。さあ、さがすんだ」

そのとき愛犬マルは、なにおもったか耳をぴんとたて、かたわらのおおきい岩のうえにとびあがり、そのむこうにすがたをけしました。まもなく、わんわんとマルのほえるこえ！

「それ、ぬけ穴だつ」

と、みなのももの岩をとびこえてみると、なるほど下につづいたぬけ道がありました。いそいでいつてみると、ぴかりと光るもの——電気鳩です。マルにおいかけています。しかも、そのそばには、団長が黒い箱をせおつてにげてゆきます。

「おいまてっ——」

と良太おじさんたちは、一生けんめいにおいかけてましたが、ぬけ穴を出たところが、がけの下でした。スパイの団長は、そこにこしらえてあった、なわばしごをつたってがけの上にあがり、そして、そのなわばしごを上にはひきあげてしまったのですから、いくら強い憲兵さんたちでも、がけをのぼることができません。

「ちえっ、さんねんだ。もうひといきでつかまるところだったのに」

憲兵さんたちは、たいへんくやしがりました。高一もさんねんですが、はしごがなければのぼれないところだからしかたがありません。

こうして、電気鳩と、黒い箱をせおったスパイの団長とは、どこかへにげてしまいました。

その後、電気鳩はどこへいったものか、いつこうにみかけませんでした。

高一の鳩たちは、またもとのように小屋のまわりに、たのしくあそぶようになりました。

高一のお父さまも安心して、あらためて、大事なご用の旅におでかけになりました。

そのうちに、鎮守ちんじゆさまの秋祭の日がきました。いろいろの見世物みせものやおもちやの店がで

て、たいへんなにぎわいです。高一は、ミドリをさそっておまいりにゆきました。

やしろの前にならんだ二人は、ふといつなのついた鈴を、がらがらとふってお父さまが、

ぶじにおかえりになるようおいのりをしました。それがすんでから、高一は、ミドリにいました。

「ねえ、見世物のほうにいつてみようよ」

「兄ちゃん、あれがおもしろそうよ」

と、ミドリがゆびさしたのは、たくさんの見世物のなかにまじって、「ぼっぼ座」と、そめだした赤や青の旗をたてた小屋です。

「さあいらっしやい。人間よりかしこい鳩の曲芸です。世界一のかしこい鳩です。坊ちや

ん嬢ちゃん、さあさあおはやく……」

と黒めがねをかけた男が、客をよんでいます。

鳩ときいては、鳩のすきな二人は見たくてたまりません。二人はいそいではいりました。はいってみると小屋の中はがらんとしていました。見物人もほんのすこしです。

「へんだなあ」

とおもったのですが、そのとき印度服インドをきた鳩つかいが、金ぴかの鳥かごを手にさげて、ぶたいにあらわれました。

「さあ、お目をとめてごらんください。これが世界一のかしこい鳩です」

鳩つかいは、長いむちでかごをたたきながら、二人の前にさしました。かごの中には、つばさの色がうす青色で、金のすじが二本とおっている鳩が、じつとこつちをみていました。

(あつ、電気鳩そつくりだ)

と、高一は目をみはりました。

「さあ、これからこの鳩にお嬢さんのおとしや、名前までもあてさせましょう。お嬢さん、どうぞこちらへあがつて下さい」

「だめだよ、ミドリ」

と、高一はそれをとめました。しかし、鳩つかいは知らぬ顔をして、ミドリをぶたいにひっぱりあげ、みょうなだいにのせました。

魔術師

鎮守さまのお祭は、いま、おみこしがかえってきたので、村の人たちは、その方に気をとられて、わつわつというさわぎのさいちゆうです。

こっちは、あまり見物人のはいつていない、電気鳩によく似た世界一のかしこい鳩をつかう、見世物小屋のなかです。印度服インドをきた鳩つかいに手をとられて、ミドリは、そのぶたいのうえにあげられましたから、兄の高一はなんだか、胸さわぎがしてなりません。

「さあ、鳩さん。お嬢さんのおとしは？」

と鳩つかいは、耳を鳩のそばへ近づけました。

すると鳩は、鳩つかいの耳のなかを、くちばしでもって、ちよつちよつとつきました。

「ははあ、そうですか」

と、鳩つかいは、さもわかったような顔をして、見物人の方に向い、

「鳩さんが申しますには、このお嬢さんのおとしは十歳だそうです。お嬢さんあたりましたか」

ミドリは、ほんとうに自分のとしをあてられたので、おどろいてしまいました。見物人は、手をぱちぱちたいて鳩をほめました。

「さあ、そのつぎはお嬢さんのお名前ですが、鳩さん、これはなかなかむずかしいが、あてられますか」

鳩つかいは、また耳を鳩にちかづけました。

すると鳩は、また鳩つかいの耳のなかを、くちばしでもって、ちよつちよつとつきました。

「ああそうですか。そこにぶらさがっている万国旗の右から三番目のいろ——というところ……」

と、鳩つかいは、ぶたいにはりまわしてある旗をみまわしました。右から三番目は、ブ

ラジルの旗でした。

「ああ、ブラジルの旗ですね。この旗のいろは青ですね。すると青子さんかしら」

すると、見物人はこえをそろえて笑いだしました。青子なんてめずらしい名だからです。「青子はおかしい。もつと、はつきりおしえて下さい。なに、青ではない緑だというのですか。なるほど、ミドリさん。ミドリさんとは、じつにかわいいお名前ですね」

「あたったわ」

なんとというかしこい鳩なのでしようと、ミドリは、かんしんしてしまいました。見物人は、また、手をたたいて鳩をほめました。

見物席では兄の高一だけが、おこったような顔をして、鳩つかいをにらみつけています。「さあさあ、そこでついでにもうひとつ、この鳩をつかってすばらしい魔術をごらんに入れましょう」

といって印度人は、おくの方に合図をいたしました。するとおくから、こどものからだが入るくらいの大きさの、美しい箱をかついできました。その箱は二つでした。それをぶたいにならべました。さあ、これからどんなことがはじまるのでしょうか。

鳩つかいは、まず、ひとつの箱のなかに、金色のすじの入った鳩を、かごと入れまし

た。

それから、こんどはミドリの手をとつて、

「さあお嬢さんは、こつちの箱へ入ってくださいね。なんのこわいことがありますよ」
ミドリが箱のなかに入ると、鳩つかいは急ににこにこして、

「まず、箱のふたをしめます」

と、両方の箱のふたをかたんとしめ、

「さあ、たしかにこつちの箱には、世界一のかしい鳩がはいり、こつちの箱には、かわ
いとお嬢さんがはいりました。ところが、私がきあい気合をかけますと、ふしぎなことがおこり
ます」

えいつと、気合をかけて、ミドリのはいっていた箱のふたに手をかけました。

きえた妹

鳩つかいはにやりと笑って、ミドリのはいつていた方の箱のふたをあけました。

「あっ」

と、高一の口から、おどろきのこえがとびだしました。なぜといって、たしかにミドリがはいったにちがないその箱のふたをとつてみると、そこに、ミドリのすがたがないのです。そして、そのかわり金色のすじのある鳩がはいっているではありませんか。

「おやおやこれはふしぎ」

と、鳩つかいはなおも、うすきみわるく笑いながら、

「お嬢さんが鳩にばけてしまいました。では、鳩の方は、なににばけているでしょうか」といつてもう一つの箱のふたをとると、あらふしぎ、箱の中はからっぽです！

ミドリは、いったいどこへいったのでしょうか。

「おじさん、ミドリを早くもとのようにかえしておくれよ」

と、高一は、ぶたいにとびあがっていいいました。

「あなた、なぜ見世物のじやまをしますか」

「だって、ミドリをかくしたりして……」

「まだ、じやまをしますね」

というと、鳩つかいは、いそいでぶたいの幕をしめさせ、高一を、見物席から見えないようにしてしまいました。そして、いきなり鳩のかごの戸をあけました。そのとたん、鳩は、すごいいきおいで、高一めがけてとびかかりました。まるで電気鳩そっくりです。

「あつ」

と、おもったときはもうおそく、高一は鳩にとびつかれて気をうしなってしまうました。ミドリも高一も、まったくひどい目にあつたものです。世界一のかしこい鳩だというが、それは、あのおそろしい電気鳩だったのです。鳩つかいにばけていたのは、にくいスパイ団長でありました。

高一は、ひやりとするつめたい風のおかげで、はじめて気がつきました。そこは、あのにぎやかに、かざりたてた見世物小屋のなかではなく、うすぐらい物おきのようなところでありました。

はっ、とおもつておきあがろうとして気がつきました。両手はうしろにまわされ、胸も腹もふといなわで、ぐるぐるまきにされていました。高一は、はがみをして、なわから手をぬこうとしたがだめです。

いつたい、ここは、どこなのでしょう。

「ミドリちゃんは、どうしたんだろう。やはり、あのわる者につかまっているんだろう。かわいそうに」

高一はミドリのことをおもうと、どうしてこのままじつとしていられましょう。しかし、なわはかたくむすばれて、とけそうもありません。

くやしなみだをぼろぼろこぼしているところへ、そとに足音がきこえ、こつちへ近づいてきます。なに者がやってくるのでしょうか。

すると、高いところにあいていた窓に、一つの顔があらわれました。それは少年の顔です。みたこともない顔ですが、大きな口をあいてよだれをながしていました。

ポンちゃんというその少年は、わる者の仲間ですから、とても、高一をたすけてくれません。

高一は、なにをおもいついたか、いつも腰にさげている鳩をよぶ笛を、ポンちゃんにあげるから、もっておゆきといました。すると、ポンちゃんは大よろこびで、屋根のやぶれ目から、柱つたいにするするとおりてきて、高一の腰についている笛をとると、また、そとにでてゆきました。

ほう、ほう、ほう。

笛は、そとでさかんになっていきます。ポンちゃんがおもしろがってふいているのです。すると、それから一時間ほどたつて、窓のそとに、とつぜん、たくさんの鳩の羽ばたきがきこえてきました。高一はにつこりとしました。

ハグロとアシガラ

世界一のかしこい鳩をつかう鳩つかいとは、まつかなうそで、これこそ、おそろしいスパイ団の団長がばけていたのでありました。高一は、体をぐるぐるまきにされ、穴ぐらのなかにおしこめられてしまって、もう、ミドリを助けるどころではなくなりました。そこで、かんがえたあげく、もっていた笛を、わる者仲間のポンちゃんにやりますと、ポンちゃんはよろこんで、それを、ほう、ほう、ほうとさかんにふきならしました。そのうちに穴ぐらのあかり窓のところいきこえる羽ばたき！

高一は、ポンちゃんに笛を吹かせてから、この羽ばたきの音を、どんなにか、まっつい

たのです。

「しめた！ ぼくの家の鳩がきたぞ」

きゆうに、にこにこ顔になった高一は、あかり窓の下にすりよって、ぴいぴいと口笛をふきならしました。

すると、くう、くう、くうとなきながら、ばたばたと羽ばたきして穴ぐらにとびこんできたのは、まさしく、高一のかわいがっていたハグロとアシガラという二羽の伝書鳩でした。

鳩は、高一の肩にとまって、くう、くうとなきたてます。鳩にも、主人の一大事がわかっていたのでしよう。

高一は、かわいい鳩に、なつかしげにほおずりをしてやりました。

しかし、いつまでもそうしてられないことを、よく知っていた高一は、体をかがめて、自分のズボンのうらのきれを口でくわえると、ベリベリとやぶりました。そして、そのきれを、口うつしにハグロにくわえさせると、ぴいぴいぴいと口笛をふきました。

その、ぴいぴいぴいという口笛は、

「はやくお家におかえりなさい」

という鳩の号令だったのです。ですから、ズボンのきれをくわえたハグロは、さつきはいったばかりのあかり窓から、いさましく外にとびだし、高一の家へかえってゆきました。ちようど、家の前に高一の愛犬マルがいるのをみると、ハグロはその前に、くわえてきたズボンのきれをおとし、マルを案内するかのようになり、さきにたつてとびました。

高一のいれられている穴ぐらの入口のところで、がちやがちやとかぎの音がし、いきなり入口の四角なあげぶたがあいて、にくいスパイ団長がはいつてきました。

「やい小僧、いいところへつれてつてやるから、このなかへはいれ」といって、手下のはこんできた、たるをゆびさしました。

「いやだ。それよりもぼくの妹をどうしたんだ。はやく、ぼくをミドリにあわせてくれ」
「ミドリはお前より一足さきに船にのりこんであ。むこうへいつてからあわせてやる」
「うむ、さては、妹もたるづめにされたのか」

「いや、たるにいれるのは、お前みたいなあばれん坊だけなんだ。さあはいれ」
高一は力およばず、とうとうたるにいれられました。

どこへいく？

高一のおしこめられた、たるは、まもなく、外にかつぎだされました。いったい、どこへはこぼれてゆくのでしょうか。まっくらなたるのなかで、高一は、気が気でありません。くう、くう、くう。

高一のおなかのへんで、ないているものがあります。それはもう一羽の鳩、アシガラで、ありました。高一がわる者のため、たるにいれられるすこしまえ、わずかのすきをうかがって、アシガラを上着の下へいれてかくしておいたのです。

そのうちに、たるは、どすんとかたいものの上におかれました。それから、つぎつぎに、どすんどすと、ほかのたるがおかれるようすです。

やがて、がたんという音とともに、たるをのせたトラックは走りだしました。

「どこへつれられてゆくんだらう。ミドリは、どうしているんだらう」

と、高一は、たるのなかにゆられながら、それを考えていました。

一^{キロ}斗も車が走ったかとおもうころ、車のうえがさわがしくなりました。

「おや、あの犬は、この車をおっかけてくるんじゃないか」

「うん、小僧がいるのをかぎつけたんだ」

「めんどうだ。ピストルでうってしまえ」

「まてっ、ピストルの音をきかれたらどうするのだ。石ころをなげつけてやれ」

えいえいと、石ころをなげるこえがします。

わわわわ、わんわん、とはげしい犬のなきごえが、車をおってきます。

「あつ、あのこえはマルじゃないか」

忠犬マルは、一生けんめいに、高一をさらってゆくトラックをおいかけてくるのであります。

どうして、それを知ったのでしょうか。そのわけは、鳩のハグロが、マルを案内して、ここまでおいかけてきたのです。

わわわわ、わんわん。

「石ころじゃだめだ。電気鳩をだそう」

「よし、電気鳩だ」

スパイ団長は、ついにおそろしい電気鳩をばっとはなしました。

高一は、それをきいておどろきました。

きや、きやんきやんきやん。

まもなくマルのかなしいさげびごえがきこえます。あわれ忠犬マルも、電気鳩にやられたようすです。

高一はたるの中で、歯をくいしばってざんねんがりました。しかし、電気鳩にかかつては、マルはどうすることもできませんまい。

「これでいい。ああ、ほねをおらせおつた」と、これはわる者のためいきです。

トラックは、四、五時間も走りつづけたのち、港につきました。

たるはそこで船のそこへつみかえられました。それは、外国の貨物船のなかでした。

その夜、高一ははじめて、すこし手のいましめのなわをゆるめられ、そして、ごはんがわりに、五つ六つのりんごがたるのなかになげこまれました。なんとというひどいことでしょうか。

わる者は、また、たるのふたをしっかりしめて、でていってしまいました。

ごごとごときかいのなる音がして、汽船は港をでてゆくようすです。

「どこへゆくのだろう。そして、ぼくやミドリをさらって行ってどうする気なんだろう」
高一は、なんとかしてミドリにめぐりあいたいと、それを思いつづけました。

すると、にわかにはげしくつ音がして、船ぞこへ大勢の人がかけおりてくるようすです。

「おい、早くさがせさがせ。早くしないと、沖に見はっている日本の軍艦にしずめられちやこまる」

「だって、電気鳩がまさかこんな船ぞこまでとんでくるものですか」

「やかましいやい。お前がぼんやりしているから、こんなことになるんだ」

そのうちに、どうんと大砲の音です。

「さあ、日本の軍艦がうったぞ。船をとめろというあいずだ。すぐ電気鳩をさがさない、ほんとうにうたれるぞ」

そういうこえは、たしかにあのにくいスパイ団長のこえです。

どうやら電気鳩がにげたようすです。そしてこの汽船は、日本の軍艦においかけられて
いるらしいのです。

高一はそれを知って、胸をおどらせました。近くの海を見はっている日本の軍艦が、こ

のあやしい船をみつけてきてくれれば、きつと助かるにちがいない。

しかし、その前に日本の軍艦の砲弾が、この汽船にうまく命中すれば、高一はたるとともに、海ぞこふかくしずんでしまわねばなりません。どどうんどどうんと、砲声はいよいよ近づいてきます。さあどうなる。たいへんたいへん。

ながれるたる

高一少年をさらってゆく外国の貨物船が、いましきりに日本の軍艦から砲撃されています。

高一は、伝書鳩アシガラとともに、船ぞこにころがるたるのなかに、とじこめられているのです。このまま、汽船がうちしずめられると、高一は、海へおちて死んでしまうでしょう。

そのとき、天下無敵に強い電氣鳩を、あやまつてにがしたスパイ団長などのわる者たち

は、たるをおいてある船ぞこをしきりにさがしています。高一は、ふとひとつのうまい工夫を考えつきました。

高一は一生けんめいで、いましめのなわから手をぬきました。ようやく、手がぬけると、こんどは力いっぱい、たるのふたを両手でつきあげました。三度、四度とやっているうちに、さすがに、かたくはまつていたふたも、ぎしりと音がして、すこしすきまができました。わる者たちは、わあわあさわいでいるので、その音に気がつきません。

「しめた。では、ここらでだましてやろう」

と、高一がたるのすきまから伝書鳩アシガラをはなすと、アシガラはぱたぱたとびまわります。

「あつ、電気鳩がいたぞ」

「しめた。さあ、はやくつかまえろ」

わる者たちは、電気鳩だと思いこんで、アシガラを大きわぎでおいかけました。

計略がうまくいったので、高一はたるの中でおおよろこびです。こうしておけば、しばらく日本の軍艦へむけておそろしい電気鳩をはなすことはできません。

「おい気をつけろ」

とスパイ団長のどなるこえがします。

「電氣鳩をつかまえるときは、ゴムの手ぶくろをはめていないと、電氣にかんじて、大けがをするぞ」

つい団長は、だいじなひみつをもらしました。

ばさつとあみをふりまわす音だの、鳩の強い羽ばたきなどがいりみだれて、たるの中の高一の耳にきこえてきました。

「さあ、早く電氣鳩をつかまえろ、そして日本の軍艦めがけてはなして、しずめてしまえ」
わる者たちはいよいよ大さわぎです。

そのうちに、どかあんと音がしたと思うと、どつと船ぞこに海水がはげしくながれこんできました。日本軍艦のうった砲弾が、船ぞこをみごとにうちぬいたのです。

とたんに、高一のはいつていたたるは、海水にのつてすうつともちあがると、水のすごいきおいで、かいだんのすきまから甲板にとびだしました。そのひょうしに、たるのふたは何かにつつかつて、高一が出るひまもなく、またもつのかたくしまつてしまいました。そして、ごろごろこころがつているうちに、ぼちやあんと海中におちてしまいました。

高一は、目をまわしてしまいました。気がついたときには、たるはしずみもせず、波のまにまに、ただよっているようでしたが、体はぐったりつかれて、ねむくてしかたがありません。

無人島

それからいく時間たったのか、おぼえていませんが、高一は、ねむりからさめました。

「おや、海の中にゆられゆられていたと思ったのに、これは、いったいどうしたんだろうなあ」

まったくへんなことでした。高一は、やはりたるの中にとじこめられているのにたるはゆれもせず、じつとしているのです。

「これはたいへんだ」

高一はたるのそとに、なにか音でも聞えはしないかと耳をすましましたが、なんの音も

聞えません。そこで、大決心をして、たるのふたを力まかせにおしました。

ふたは、ぼかりとあきました。高一はたるの中から首を出しました。

「あつ、海岸だ！」

嵐はすつかりおさまり、朝日はまばゆく海上にかがやいていました。あたりはまっくろな砂が、いちめんにある美しい海ですが、うしろには、けわしい岩山がそびえていて、おそろしげに見えます。

「ここはどこだろう」

高一は、たるのなかから出て、めずらしげにあたりをながめました。まったく見たこともないところですよ。

高一は元気をだして、うら山にのぼってみました。そこへあがると、きつと村かなんかが、みえるにちがいないと思ったからです。

ところが、うら山にのぼってみておどろきました。村が見えるどころか、ここはいつけんの家もない小さな無人島（人のいない島）だったのです。

「無人島へながれついたとはよわった」

と、高一はひとりごとをいいました。

そしてなおも、あたりの海面を、しきりにみまわしていましたが、

「あつ、ボートみたいなのが二そう、こつちへこいでくるぞ」

たしかにボートです。大ぜいの人が、ぎつしりのつているようです。

高一は、おういと手をふりかけましたが、いや、まてまて、もし、わるいやつらの船だつたらこまると思つてみあわせました。

やがて、ボートは波うちぎわにつきました。どやどやと船からおりてくる人をうら山のかげから見っていた高一の目は、きゆうにかがやきました。

「やあ、ミドリがいる!」

ミドリばかりではありません。

そのそばには、あのにくいスパイ団長もいました。

どうやら、れいの貨物船は、日本軍艦の砲弾にあたつてしずんだようすです。だからわる者たちは、ボートにのつてにげてきたのでしよう。

「ああ、かわいそうな妹……」

ミドリは、兄の高一が山の上から見ているともしらず、しよんぼりとして、わる者たちに手をひかれていました。村の見世物小屋からさらわれたままのすがたです。団長は、こ

のかわいそうなミドリを、どうしようというのでしょうか。高一はすぐにもとんでいききたいきもちでしたが、そんなことをすれば、またいつしよにつかまると思っ、がまんしました。

高一はすき腹をかかえて、夜をむかえました。わる者たちの方は、海べりにテントをはり、さかんに火をもやして、なにかうまそうなたべ物をにているようです。

高一は、うら山からぬけだすと、そつと、テントの方へおりてゆきました。さいわい、たれにも見とがめられずに、テントに近づくことができました。

「団長、こんな足手まといの娘なんか、ひと思いにころしてしまった方がいいじゃないか」
たれかが、おそろしいことをいっています。

「ばかをいえ。お前にはまだわからないのか。この娘をつれていって父親をせめりや、こんどこそは、日本軍の一番だいじにしている『地底戦車』が、どんなもので、どこにかくしてあるかをいわせることができるじゃないか」

わる者どもの話によつて高一は、お父さまが、日本軍にとって、たいへんだいじな「地底戦車」のしごとをしていることをしりました。スパイ団長は、これからお父さまをひどい目にあわせ、日本軍に大きなそんをさせようとしているのです。

ミドリもかわいそうだが、お国のひみつを知られることは、なおさらこまったことです。「どうしてこれを、日本軍や、お父さまに知らせたらいいだろう」

高一は、なんとかしていいちえをひねりだしたいものと考えながら、ふと、波うちぎわを見ると、一つの大きなたるがながれています。そばによってみれば、ふしぎや中でのことと音がしています。なにが入っているのでしょうか。

いたいた、電気鳩

無人島にながれついた高一少年のことは、後から、おなじ島へあがってきたスパイ団長や、その手下のわる者どもに、まだしれていないようでありました。しかし、そのうちにしれてしまうことでしょう。そのときはたいへんです。きつとつかまってひどい目にあうにきまっています。

高一が、波うちぎわで、ひとつの大きなたるを見つけたことは、まえにいいましたが、

近づいて、たるのふたをすこしあけてのぞいてみると、おどろくではありませんか、なかには、見おぼえのある電氣鳩がはいっていたのです。

「あつ、電氣鳩だ。なぜこんなところにはいつているのだろう」

目のぴかぴかひかる電氣鳩です。人がさわれば、電氣がつたわって死ぬ電氣鳩です。そして、スパイ団長が船のなかで行方をさがしていたその電氣鳩です。

きつと、なにかのひょうしで、このたるのなかへまよいこんだとき、うんわるく、ふたがぱたんときまつて、でられなくなつたのでしよう。

電氣鳩はどうかしたらしく、足でたつこともできず、ぱたぱたとつばさをふるわせるばかりで、元氣がありません。高一は安心して、電氣鳩を、たるの中から棒きれでそつとだしてみました。

「へんだなあ、あんなにあばれた鳩だつたのに」

高一は、首をかしげました。

高一は、思いがけなく電氣鳩を、とりこにしたので、たいへんうれしく思いました。しかし、このままにしておいては、いつスパイ団にとりもどされるかもしれないと思つたので、高一は、鳩をもとどおりたるのなかへ入れたのち、海岸の砂はまに、大きな穴をほり、

そのなかにうめてしまいました。

「こうしておけば、スパイ団にみつかるしんぱいはないだろう。さあ、こんどはかわいいそうなミドリを、たすけてやらなくてはならない」

日のくれるのをまって、高一はだいたんにも、スパイ団のテントにそろそろしのびよりしました。するとテントのなかでは、団長をはじめわる者どもが、お酒をのんで、おおごえでうたつたりおどつたりしているところでありました。

そのうちに、団長もよろよろとたちあがって、手をふり、足をふんで、おどりだしましたが、かたにかけている小さなかばんが、ぶらぶらするので、じやまになって、うまくおどれません。

「いよう、団長しつかり。そんなきたないかばんなんか、おろしておどれよ。あつはつはつ」

たれかが、ばかにしたような笑いかたをしました。団長は目をむいて、

「ばかをいえ。きたなくても、この中には、電気鳩をうごかす大事なきかいはいつているのだぞ。どうしておろせるものか」

電気鳩をうごかすきかい！ ああ、そんなきかいはあったのか。電気鳩は、このかばん

をもっているスパイ団長の手によってうごかされていたのです。高一は、テントのすきまから、目をまるくしておどろきました。

「電気鳩は、海のそこにしずんでしまっただよ。うごかすきかいばかりのこっついていても、なにも役にたたんじやないか。あつはつはつ」

「そうだ、それもそうだな。じゃ、こんなかばんを大事にしておくんじやなかった」

そういつて団長は、その黒いかばんをかたからはずして、テントのすみにほうり投げました。そして、すっかり身がるになつて、ゆかいにおどりはじめました。

そのとき、テントのすみから、小さい手がぬつとあらわれました。その手は、そろそろと、黒いかばんの方へちかづき、それを、じつとつかむと、するするとテントの外にひっぱりだしました。

あやしい小さい手です。それは、いつたいたれの手だったのでしょうか。

めぐりあい

「しめしめ、電気鳩をうごかすきかいが手にはいったぞ。ようし、いまに見ておれ」

テントの外では、高一少年が黒いかばんをぶんどつて、おおにこにこであります。

「さあ、ここで、わる者どもが酒によっぱらっているうちに、ミドリをさがすのだ」

と、高一は勇気百倍して、ほかのテントへいつてみました。

丘のかげに、ひとつのまつくらなテントがありました。どうやら番人がいそうもないので、高一は、もつていた懐中電灯をつけてみると、中には、船からもつてきた荷物がたくさんつんであります。

「おうい、ミドリちゃんはいないか」

高一は、早口に妹の名をよんでみました。

そのとき、つみかさねてあつた荷物が、がさがさとうごぎだしました。

「あつ兄ちゃん。あたしはここよ」

帆布はんぷがまるめておいてありましたが、その中から、とつぜん、なつかしい妹ミドリのこえがしたものですから、高一は、

「おお、ミドリちゃん。よくまつていてくれたね。いまたすけてあげるよ」

と、かけよりました。帆布をのけていると、その下にかわいそうなミドリが、手足をくくられてつながれていました。高一は、わる者ども、にくいやりかたにはらをたてながら、つなをほどいてやりました。そして、きようだいは、ひさしぶりに、たがいに手と手をとりあつたのです。うれしさに、なみだが、あとからあとからわいてきて、きようだいは、はじめのうちは、おたがいの顔をよく見ることができませんでした。

「ぐずぐずしてはたいへんだ。ミドリちゃん、すぐ、にげよう」

高一は、妹をひつたてるようにして、テントの外にのがれました。そして、電氣鳩を砂のなかからほりだし、それを、ゴムびきのかっぱにつつんでわきにかかえました。

「兄ちゃん、どこへにげるの」

「船にのつて、すこしでも早く、この島からにげだすのだよ。海へ出れば、きつとどこかの船にであい、たすけてくれるよ」

くらい海岸へでてしらべてみますと、ボートが二そうありました。さいわい番人もいません。高一にはなかなか動かしにくいボートでしたが、それでも一生けんめいに海の中におろし、そのひとつにのりこみ、もう一そうは、うしろにひっぱってゆくことになりました。

高一は「地底戦車」を発明したお父さまが、敵国からにらまれていることがしんぱいになりません。それで、死にものぐるいで、くらい海にこぎだしました。

「兄ちゃん、もうひとつのボートはいらないのでしよう。おいてくればよかったのにねえ」
「いや、のこしておけば、わる者どもが、それにのっておっかけてくるじゃないか」

高一は、いつもあわてないで、よく考えていました。やがて、ボートの一つは船ぞこのせんをぬいて海の中にしずめてしまいました。これで、スパイ団長をはじめわる者どもは、無人島に島ながしになって、どこへもゆけなくなつたのです。やがて気がついて、さて、おどろくことでしょうか。しかし、あのわる者どもが、そのまま、おとなしく島ながしになつていてでしょうか。

くらい海を、高一とミドリのボートは長いあいだただよっていました。

やがて夜があげました。たすけの船はと思つてあたりをたえずさがしたのですが、いじわるく、船のかたちも、煙のかげも見あたりません。どうなることかと思つているうちに、その日のおひるすぎになつて、二人はどうじに、ぶうんという音を耳にしました。

「あつ、飛行機だ」

晴れわたつた空を、手をかざしてさがしてみますと、あつ見えました見えました、一だ

いの飛行機がたかいところをとんでいます。

「おお、こつちへくるらしい」

助けをよぼうか、どうしようか、と思っっているうちに、飛行機は、ぐつと前の方をさげました。敵か味方か、どつちの飛行機でしょうか。

はたらく電気鳩

高一少年は、スパイ団にとりにこにされた妹ミドリをすくいだして、無人島をあとに、ボートにのつてにげてゆきます。ボートのなかには、高一がスパイ団からぶんどった電気鳩と、その鳩をうごかすきかいはいったかばんとをつんでいます。これはたいへんなお手がらです。ボートをこいで、沖の方にでてゆくうち、一だいのあやしい飛行機が、二人の頭の上にあらわれて、あらあらしくさつとまいさがってきました。敵か味方かと思っっているうちに、飛行機は、まっしぐらにばくだんをはなちました。ああ敵です。

「兄ちゃん、ばくだんよ。ああ、あぶない」

ミドリは、顔をまっさおにしてさげびました。高一少年は、ボートにばくだんがあたつてはなるものかと、オール（かい）を力いっぱいこいで、のがれようとつとめました。

ど、どかあん。ぐわうん、わわわん。

二人のきょうだいの目の前に、とつぜんものすごい水けむりがたちました。ばくだんがはれつしたのです。いいあんばいにあたりませんでした。そのかわり、ものすごい波がおこつて二人のボートはひっくりかえりそうになりました。空では、敵の飛行機が、またばくげきのかまえをしました。

「あつ兄ちゃん、またばくだんをおとすわよ」

高一はくやしきにはがみをしました。飛行機は、たしかに、スパイ団の味方なのです。

この飛行機こそ、きょうだいがにげだしたあとで、それときづいたスパイ団が、無線電信でよびよせたものでした。きょうだいのいのちは、風のふくまえにたてた、ろうそくの火のようにあぶない！

さあ、どうなるか。せつかく、ここまでにげのびた、いさましいきょうだいなのに。

高一少年は、いまは、おどろいたり、かなしんだりしていられません。なんとか妹のい

のちをたすけることを考えだしたいとあせっています。どうすればいいのでしょうか。

「ああ、そうだ。いいことがある」

「いいことって、どんなこと」

「電氣鳩をつかつてみよう」

高一少年は、すばやくきかいのかばんをかたにかけると、その目もり盤ばんを、うごかしてみました。すると、電氣鳩がつつみのなかから出てきました。

「うむ、電氣鳩がうごきだした。もう電氣鳩は、こっちの味方だぞ」

電氣鳩は、かばんのなかにある電氣のしかけでうごくことがわかりました。外国には、こうしたきかいで、人間がひとりものつていない飛行機をとばす発明があります。それも電氣の力でうごかすのです。それとおなじしかけです。

目もり盤のまわしかたで、電氣鳩はどっちへでもとびます。それがわかったので、高一は電氣鳩を敵の飛行機へむけてとびかからせました。

ぱたぱたと、つよい羽ばたきをして、電氣鳩は、飛行機をおいかけてました。

「電氣鳩さん、しっかり」

電氣鳩は、すごいはやさでとんでいって、ついに飛行機につきあたりました。ぱつと赤

い火花がちったかと思うと、たちまち飛行機はほのおにつつまれて、ついらくしました。

「ああすてきだ。ばんざあい」

「ああよかつたわ。電気鳩さん、ばんざあい」

きょうだいはボートの中で、両手をあげてさげました。

わる者ののつた飛行機は、海中におちて、そのまま波にのまれてみえなくなりました。

そのとき、いつのまにあらわれたか、駆逐艦が一せき、波をけたてて二人のボートをたすけにきました。駆逐艦のうしろにはためく軍艦旗をみたとき、高一とミドリは手を取りあつて、うちよろこびました。日本の軍艦旗です。

駆逐艦からはボートがおろされ、水兵さんがそれをこいで、二人の方にちかづき、大きい駆逐艦の上へたすけあげてくれました。

電気鳩は、もちろん、高一がきかいをまわして手もとへよびよせました。

軍艦から大陸へ

わが海軍の駆逐艦にすくいあげられたきょうだいは、たちまち艦内の人気者になりました。

艦長吉田中佐は、きょうだいの冒険談をきいて、そのいさましさほめました。そして、艦隊の方へ無線電信をうって、にくいスパイ国をこれからせめてもよいかと問いあわせました。

すると、すぐ艦隊の司令官からへんじがあつて、スパイ国のせいばつよりも、「地底戦車」を發明した、きょうだいの父親が、いまわる子どもにひどい目にあっているから、二人をつれてすぐこつちへかえつてくるようにと命令が出ました。

高一とミドリは、しんぱいでもあり、またおよろこびです。これから海軍の軍人さんたちと、父親をたすけにゆくことになったのですから。駆逐艦は北の方にむきなおると全速力をだしました。

荒海の波をけたてて、ずいぶん、ながい間走りつづけて、駆逐艦はついに港につきました。

高一とミドリとは、艦長におわかれをいって、大石大尉という士官につれられて上陸し

ました。

上陸してみると、これは日本ではなく、朝鮮半島でありました。朝鮮半島もずっと北の方で、満州国にちかいところの、さびしい港町でありました。

「大石大尉、私たちのお父さんはどこにいるのですか」

と、高一がたずねると、大尉は顔をくもらせて、

「それがねえ、たいへんなところなのだよ」

「たいへんなところというと——」

父親がたいへんなところにいるときいて、高一とミドリはまっさおになりました。

大石大尉は金庫をあけて、中から一枚の地図をとりだし、高一とミドリの前にひろげました。

その大地図は、国ざかいふきんのくわしい図面でした。なかほどに大きな川がながれており、その川のまん中に、中の島があります。

その中の島を大石大尉はゆびさして、

「この中の島なんだよ。あなたがたのお父さまがとりこになっているところは——」

「えっ、とりこですって」

「そうだ、敵のため、ここにつれこまれたのだ。敵はお父さまの発明した『地底戦車』のひみつをしりたくて、こんなひどいことをしたのだよ」

「なぜ、助けださないのです」

高一はこぶしをにぎってさげびました。

「まあ、きてみてごらん」

高一とミドリは、大石大尉にともなわれて、ざんごうへ出ました。そこから二本の角^{つの}がでたような望遠鏡で、中の島の方をそつとのぞかせてくれました。

「ああ、これはトーチカだ」

「えっトーチカ。トーチカって、あの——」

きょうだいのおどろくのもむりではありません。鉄とコンクリートでかためたちいさい要塞^{ようさい}で、そのちいさい穴から大砲や機関銃が、いつでももうてるように、こつちをむいているのです。せめてもなかなかおちない要塞です。

「せめてゆけないこともないが、そうすると、お父さまもころしてしまふ。まったく私たちもこまっているんだ」

大石大尉は、ざんねんそうにいいました。

いろいろ苦勞して、せっかくここまでできてみれば、きょうだいの父親はトーチカの中にとらわれの身となつて、こつちから鉄砲もうてないのです。高一も、がっかりしました。しかし、どうしてこのまま父親をみごろしにできませんよう。ミドリはなるべくばかりです。それからというもの、高一はたすけだす工夫をいろいろと考えました。そして、ついに大決心をしました。

それは三、四日のちの朝のことです。中国服がたの高一は、川上から船にのりこみました。高一は、あのおそろしいおそろしい力の電気鳩をつれています。そのほかに、一頭のなつきやすい軍用犬をかりうけて、船にのせました。

いよいよ決死の冒険です。高一はうまく父親を助けだせるでしょうか。

輝く日章旗

中の島にある敵のトーチカに、お父さまがおしこめられているときいて、高一少年は大

決心をしました。妹ミドリのことは、大石大尉などによくたのんで、高一は中国人少年にすがたをかえ、あのおそろしい力のある電氣鳩を、ゴムの袋に入れて腰にさげ、一頭の軍用犬をつれて、川上から船にのりました。

さいわい、川の上には朝ぎりかもやもやとたちこめたので、うまく敵兵の目をくらし、ぶじに中の島にこぎよせることができました。

さあ、これからどうして、お父さまの秋山技師をたすげますか？

高一としては、もとより命をなげだしての大しごとです。父親が敵にとりこにされていのをみて、どうして、じつとしていられますようか。また、日本の国をまもる「地底戦車」を発明したお父さまを、いつまでも敵にうばわれていて、それでいいものでしょうか。とって、日本の兵隊さんがせめれば、お父さまのお命があぶない——子供なればこそできるかもしれないという、今日の大冒険なのです。

「お父さまをぶじにすくいだすことができれば、ぼくは、死んでもいいんだ」

島についた高一は、まず船のなかから、りんごのいっぱいはいったかごを上にあげました。そして、軍用犬をつれて島にとびあがりました。

高一は、りんごのかごをかたにかけて、トーチカの方へ歩いてゆきました。

「こら、少年まで。どこへゆくんだ」

思いがけない立木のかげから、銃剣をかまえた敵兵がとびだしました。

「……」

高一は口をきかないで、かごのりんごをゆびさしました。そしてむしやむしやたべるまねをして、ほっぺたがおちるくらい、おいしいぞという顔をしてみせました。敵兵は、

「なんだ、お前は口がきけないのか。りんごを買えというのだな。なるほどまそうなりんごだ——しかしこの小僧め、どこから来たか、ゆだんがならないぞ」

と、つばをのみこんだり、目をむいたり。

高一は、敵兵と仲よしにならないかと思えばいけないと思い、一番おおきいりんごをひとつとって、敵兵の手にのせてやりました。

敵兵は、おどろいた顔をしました。やがて、ポケットからお金を出そうとします。高一は、いらぬいらぬとおしかえし、そして、早くたべろと手まねですすめました。

敵兵はりんごをたべると、きげんよくなりました。そこで、高一はトーチカの方へりんごを売りにゆきたいから、つれていってくれと手まねをし、またひとつりんごをやりました。

このよくばり敵兵はすっかりよろこんで、高一を、トーチカの方へつれてゆきました。

「おいみんな、うまいりんごを売りにきたぞ」

そういうと、中からどやどやと敵兵があらわれました。

りんごはうまいうえに、ねだんもたいへんやすいので大人気です。

ところがとつぜん、高一はうしろから大きい手で、かたをつかまれました。

「こら、小僧。口がきけないふりなどをしているが、あやしいやつ、お前は日本のスパイだろう」

高一が、ふりかえってみると、りっぱな敵の将校でした。それは、トーチカの隊長だったのです。

高一は、わざとかなしい顔をしてあやまりましたが、隊長は、しうちしません。そして、高一をひきずるようにして、トーチカの中の自分のへやにひっぱってゆきました。りんごはかごからおちて、そこらじゅうにごろごろところげました。

「さあ、こつちへはいれ。しらべてやる」

高一はもうこれまでと思い、腰の袋をあけて電氣鳩をだしました。そして、りんごのこのなかにかくしてある、電氣鳩をうごかすきかいをひねりました。

電気鳩は、ものすごい羽ばたきをして、隊長の頭の上をぐるぐるまわりだしました。

「おや、へんな鳥がとびだしたぞ」

隊長は、はらをたてて剣をぬくと、電気鳩にきりつけました。

「あつ——」

ぴかり、といなびかりがみえたかと思うと、隊長は、その場にたおれました。電気鳩の
だした電気にあたって死んでしまったのです。

その物音に、トーチカのおくから大ぜいの敵兵があらわれ、ピストルや、剣をもって高
一にむかってきました。

「さあ、こうなればだれでもむかってこい」

高一は、せめてくる敵兵めがけて電気鳩をとびかからせ、かたっぱしからたおします。
じつにもものすごいいきおいです。さすがの敵兵も、手のくだしようがありません。

高一は、ころあいをみはからって、軍用犬にひとつの大切な命令をつたえました。軍用
犬は、まっていますとばかり、トーチカのおくめがけてかけだしました。そのいいつけ
はなんであったでしょうか。

高一と、敵兵とのたたかいは、つづけられましたが、電気鳩には、とてもかないません。

そのうちに、犬がわんわんほえながらもどつてきました。

「おお、わかったか。よいいこう。さあ、つれていっておくれ」

高一は電気鳩をつれて、軍用犬のうしろからかけだしました。

「わん、わん、わん」

軍用犬は、ひとつのとびらの前で、しきりにほえています。しかし、そのとびらには大きな錠じょうがおりていて、あけることができません。

「そうだ、これは電気鳩にたのもう」

高一は、電気鳩を錠にぶつからせました。すると錠から、ぱちぱち火花がでたかと思うと、たちまちやけきれてしまいました。

高一は、とびらに手をかけてひきました。とびらはすぐあきました。

「ああ、あいた」

と、さげんで、高一は中にとびこみました。うすぐらいへやのすみに、ひげぼうぼうの日本人が手をしぼられていました。

「あつ、お父さまだ」

高一はなみだとともにかけよりました。

「おお、お前は——お前は高一か！」

秋山技師は、よろよるとたちあがつて、高一にからだをすりつけました。あまりの思いがけなさに、またあまりのうれしさに、あとはなみだばかりで言葉もでません。

「さあお父さま。すぐここをにげましょう」

「ああ高一、それはだめだよ。敵兵にみつかつてころされるばかりだ」

「お父さま、大丈夫ですよ。ぼくは電気鳩をもっているんですから」

「えっ、電気鳩……」

「そうです。電気鳩さえあれば、どんな大敵がきてもだいじょうぶです。さあはやくにげましょう」

高一が、父秋山技師をつれてトーチカを出たとき、ちょうどそこへ、大石大尉が陸戦隊をひきつれてかけつけました。大尉も決死のかくごで、中の島へせめこんできたのです。

しかし、敵は電気鳩にやられてよわりきっていましたので、わけなく上陸できたそうです。

「高一君、じつにりっぱなはたらきをしたね、おめでとう。みんなでばんざいをとなえよう」

トーチカの上に日章旗をたてると、大尉のおんどで、陸戦隊や、高一やお父さままで力

いっぱい、ばんざいをさげびました。

むこう岸にまっていたミドリが、どんなによろこんだか、申すまでもありません。

電気鳩をうごかすふしぎなしかけは、秋山技師がしらべて、すっかりわかり、大へんめずらしいというので、いまも大切にしてあるそうです。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第4巻 十八時の音楽浴」三一書房

1989（平成元）年7月15日第1版第1刷発行

初出：「幼年倶楽部」大日本雄弁会講談社

1937（昭和12）年8月～1938（昭和13）年4月

※「羽ばたき！」と「海岸だ！」の二箇所のみでは、「！」は斜体となっています。

入力：tatsuki

校正：まや

2005年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

電気鳩

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>